

大学院での学びを生かした新たな挑戦

東京医科歯科大学医学部附属病院 災害テロ対策室

宮前 繁

私は、大学院にて災害看護グローバルリーダー養成プログラムを修了した後、今年の4月より東京医科歯科大学医学部附属病院の災害テロ対策室にて勤務しています。大学院では、以前より関心があった災害時に地域住民の命や健康を中核になり支える災害拠点病院の災害対策、災害拠点病院と多組織間の連携を中心に学びを深めました。現在の職場では、これまでの学びを生かした実践の展開を心がけながら、さらに能力を発展させるべく、業務に向き合っています。

当院では、COVID-19に対応すべく、4月より新型コロナウイルス対策室が設置され、入職後すぐに専従の対策室員として活動を始めています。東京医科歯科大学では、COVID-19に対し大学が一丸となって取り組む“ALL-TMDU”での対応を開始しており、大学-歯学部附属病院-医学部附属病院が連携し、効果的な医療・ケアの提供が行えるよう対策室で調整業務に励んでいます。

新たな組織で、右も左も分からぬまま開始した災害対応、そして新興感染症のパンデミックという実践経験がない災害対応において、CBRNE（Chemical-Biological-Radiological- Nuclear-Explosive）災害対応の知識など、これまでの学びが生かされています。特に、現在担っている業務では、大学院で学んだ災害時のコーディネートに関する知見を応用しており、COVID-19に対応する各部門の役割および部門間の関係の明確化、情報の収集と発信における経路の確認および確保を行なった後に、情報を整理し、対象に応じた形で情報を発信、周知するように活動しています。この際に、災害対応における意思決定に求められる情報について学修していたこと、また情報を図表等にまとめ適した形で説明する技術を学んでいたことが、現在の迅速な対応につながっていると考えます。

一方で、新たな組織で活動することの困難もあります。災害は、日常の延長線上で生じ、対応もまた日常の延長線上で行われます。その際に重要であるのは、普段どのようにしているのかということです。円滑かつ効果的な対応をするために、災害モードに切り替え新たなことを始めるのではなく、日常にあった指揮命令系統や情報の流れ等、既存の現場対応を最大限に生かす必要がありますが、その日常をまだ理解できていないため、一つ一つのことに普段の業務ではどうしているのか、対応するにあたりどのような可能性があるのかについて、最前線に対応する職員の声を確認しながら、最適解を見つけ出せるよう活動する必要があります。これまでの活動を通じて、顔の見える関係性が構築されてきたことで、少しずつ現場の声に答える調整が叶い始めていることに、これまでの学びが一つ一つの成果につながっていることを実感しています。

直接ケアを行う看護職、それを支える後方支援、その組織を導く組織運営、そしていくつもの組織が共存する地域、それぞれの場でそれぞれの実践、困難への挑戦があり、その一つ一つがつながることで、患者や住民の皆様の生命・健康・暮らしを支えることができ、全ての人がCOVID-19に立ち向かう活力になると信じています。一刻も早く、感染症に脅かされない安心安全な社会になることを願い、引き続き、皆様と一緒に今回の災害対応に取り組んでいきます。

対策室での活動の様子 *筆者左下

